

「別れの食卓」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 12章1-8節

3月は、年度末でもありますので、保育園、こども園でも卒園式の時期でありますし、それぞれの職場でも、学校でも、様々なお別れの会が催されたりすることと思います。一緒に仕事をがんばってきた仲間や、共に机を並べて学んだ友人、あるいは共に暮らしてきた家族と、異なる場所において歩みを始めるために別れることというのは、旅立つ側にとっても見送る側にとってもお互いに非常に寂しいことではありますが、しかし別れというのは新しい出会いへのプロセスでもあることを思います。

本日は、ベタニアでイエスが香油を注がれるという、イエスの受難物語の冒頭部分として位置づけられた有名な話です。これはマタイによる福音書、マルコによる福音書によっても同じような話が伝えられていますし、ルカによる福音書においても、受難物語の流れとは文脈が異なるものの、「罪深い女を赦す」というエピソードとして、イエスに香油を塗る女性のことが語られています。

イエスがこのベタニアに行かれたのは、過越祭の6日前のことであると今日の聖書には記されています。過越祭とはご存知のように、ユダヤ人の3大祭り、過越祭（除酵祭）、五旬祭（七週祭）、仮庵祭のうちの一つで、旧約聖書の歴史における重要な出来事、出エジプトの出来事を祝う祭りです。出エジプト記に書かれていますが、はるか昔、イスラエルの民を奴隷とし、解放しようとしなかったエジプトのファラオに対して、モーセが神の力により10の災いを下したわけです。血の災い、蛙の災い、ぶよの災い、あぶの災い、疫病の災い、腫れ物の災い、雹の災い、いなごの災い、暗闇の災い、そして最後の災いがエジプトの国中のすべての初子の命を奪う災いでした。それこそ、ファラオの初子から家畜の初子まで、すべての初子の命が災いの対象でした。ただ、イスラエルの民だけはその災いを免れるように、イスラエルの民の家の入り口に屠った子羊の血を塗っておくように神は命じられたわけです。すると、その子羊の血を入りに塗った家だけは、神が過ぎ越して（通り過ぎて）行ったので、その家の初子は災いを免れました。この最後の災いが決め手となって、イスラエルの民はエジプトを脱出することを許されました。ですから、過越祭とは、それを記念して毎年行われている盛大な祭りだったわけです。

さて、このベタニアというところは、ヨハネによる福音書 11 章、今日の聖書の少し前の方にも記されてありますが、イエスがマルタとマリアの兄弟であるラザロを死者の中からよみがえらせた場所でした。そしてイエスがそこを再び訪れた時、イ

エスのために夕食が用意され、ラザロも共に食事の席にいたと書かれています。きっと、マルタとマリア、ラザロのきょうだいは、深い感謝をもってこの食事の場を準備し、イエスたちを招き入れたことでしょう。

そうしていると、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を1リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐいはじめたわけです。ナルドの香油1リトラというと、326グラムであるといえます。量でいうと約300cc、コンビニや自動販売機にあるような小さなペットボトル、あれが280mlなので、それとまあ同じくらいでしょうか、しかしたったその300グラムちょっとの香油が、イスカリオテのユダに言わせると、300デナリオンで売れるほどの物であったわけです。300デナリオンというと、一人が約300日生活できる金額なのだそうです。つまり、その300グラムのナルドの香油だけで、人が1年間暮らしていけるくらいの値打ちがあるということになります。私たちの感覚で分かりやすく言うと、小さなペットボトルくらいの量で300万円以上するような油、それをマリアは、イエスの足に惜しみなく塗ってあげたというわけです。

マタイ福音書、マルコ福音書においても、今日のこの話と同じようなエピソードが書かれているとお話ししましたが、そちらの方では、重い皮膚病のシモンの家で、名もないある女がイエスの頭に香油を注いだというふうに記されています。しかし今日のこの話では、イエスの友人であるマリアがイエスの足に香油を塗り、自分の髪の毛でその足をぬぐったわけです。バークレーという学者は、このマリアの姿に、「愛の謙虚さ」「愛の浪費性」という言葉を当てはめています。イスラエルの歴代の王であったサウル、ダビデ、ソロモンなどは、みな頭から油を注がれて王になった者たちでした。「メシア」とか「キリスト」という呼び名の意味も「油注がれた者」という意味です。しかしマリアはイエスの頭ではなく足に香油を塗り、自分の髪の毛でぬぐったわけです。マリアは、ラザロのことで自分たちはイエスに救われた。自分たちは、自分は、助けてもらった、救っていただいた立場であって、イエスの頭に香油を注ぐことができるほどに自分はそんな立派な者ではない、そんな立場ではない、そんなイエス様の頭に香油を注ぐなんてできない、と考えていたのかも知れません。しかし、ラザロをよみがえらせてくれた一方で、自分自身は十字架という死に向かっているイエスのことも、マリアはうすうす察していて、そんなイエスに対する、マリアの心を込めた最大限のもてなしが、高価な香油をイエスの足に塗り、自分の髪の毛でイエスの足をぬぐうという一連の行為だったのではないのでしょうか。それがバークレーの言う「愛の謙虚さ」「愛の浪費性」の意味するところであるように思います。

3節の後半において、マリアがイエスの足に香油を塗ると、「家は香油の香りで

いっぱいになった」と記されています。何気ない描写であるように思われますが、この香油のかぐわしい香りというのは、頭と足という違いこそあれ、まさに油注がれた者に対する神の祝福を象徴しています。そしてそれにも増して、イエスを招き、食事と香油をもってもてなしたこの3人の兄弟姉妹のイエスに対するたとえようもない感謝と慈しみ、思いやりでその場が豊かに満たされたことをも表していると言えるでしょう。「本当にありがとう。寂しくなるし、辛いこともあるかもしれないけれど、祈っています。」3人の兄弟姉妹のそんな言葉が、そこから聞こえてくるような気がします。

その一方、その場の空気、マリアの油注ぎによって、心温まるような雰囲気になったその場の空気をまったく読めていないイスカリオテのユダは、「なぜ、この香油を300デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」などと、本当に興ざめするようなことを、もっともらしい口実をつけて言い、マリアを非難しています。「やかましわ!」とって頭の一つも叩きたくなりますが、イエスはこのマリアたちの好意を素直に受け取っておられます。イエスはマリアの行為を「わたしの葬りの日のために、それを取って置いた」ととらえています。詩篇23:5にもこう記されています。「私を苦しめる者を前にしても、あなたは私に食卓を整えて下さる。私の頭に香油を注ぎ、私の杯を溢れさせて下さる。」この詩篇の言葉は、そのまま今のイエスの気持ちを代弁しているように思えます。イエスが自分を苦しめる者を前にしていること、なおかつ十字架を前にしていることを知ってか知らずか、もてなしの食卓を整えてくれたこの3人の兄弟姉妹たち。愛の謙虚さをもって自分の足に香油を注ぐことで、死への不安と弟子たちへの苛立ちしか入っていなかったイエスの心の杯に、穏やかな喜びと勇気を溢れさせてくれた兄弟姉妹たち。「貧しい人々はいつもあなた方と一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない」という言葉の意味を弟子たちよりも誰よりもよく分かっていたのは、彼ら3人だったのかも知れません。

別れは新しい出会いへのプロセスであると最初に申し上げました。あと2週間後には受難週、キリスト最後の1週間を迎えます。棕櫚の日曜日から、洗足木曜日、そして受難日を迎え、イエスとの別れが訪れます。しかし、イエスといったん別れても、私たちには復活のイエスとの出会いが約束されています。私たちが復活のイエスと出会うことができるように、イエス・キリストの十字架への歩みを、残るレントの日々、共に謙虚にたどっていきたいと思います。